

キーワード16 心理的事実

小学校2年生のIさんは、友達がなかなかつくれず、時々学校に来るのを渋ることがあった。

体育の授業が終わったあと、子供が「先生、KちゃんがIちゃんを泣かした。」と担任のJ教諭に声をかけた。J教諭が行ってみると、Iさんがしゃがみこんで泣いている脇で、Kさんが困った顔をして立っていた。

J教諭：「Kさんどうしたの？ Iさんはどうして泣いているの？」

Kさん：「なんだか、わかんない。『とび箱とべた？』って聞いたら、泣き出しちゃったの。」

J教諭：「あっ、そう。Iさん、どうしたの？ お話してごらん。」

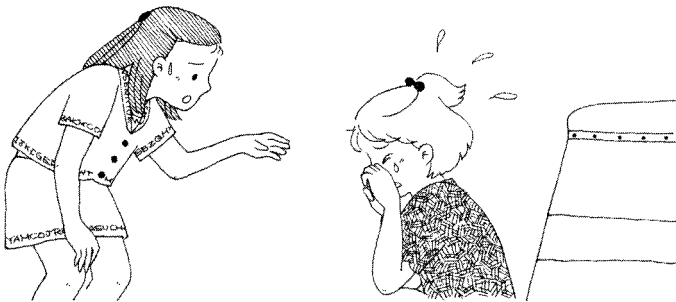
Iさん：「Kちゃんがね。私がとび箱へたなのを知っているのに、『とべた？』なんて聞くんだもん…。」

J教諭：「Kさんは、どういう気持ちで聞いたの？」

Kさん：「私はね、Iちゃんがとべたかどうか心配だったから。」

J教諭：「Iさんは、それを聞いてどう思ったの？」

Iさん：「Kちゃんて、いじわるだなと思ったの。」



この事例からも、同じ事柄に対して、人それぞれにとらえ方・感じ方が違うことがわかります。このようなとき、頭で分かっている、いざとなると自分の感じ方を相手に押しつけてしまうことがあります。

聞いてみないとわからない心のうち

Kさんの「とび箱とべた？」の一言で、Iさんが泣いてしまいました。Kさんは、Iさんのことが「心配だったから」聞いてみたと言い、Iさんは、そう聞かれて「いじわるされた」と感じています。どんな気持ちでその言葉を発したのか、それを聞いてどんな気持ちになったのかを確かめないと、心のうちは分からないものです。

その子のとらえ方・感じ方を大切に

このように、一つの事実をめぐる、そのとらえ方・感じ方が異なることはよくあります。そんなとき、どちらかが間違いというのではなく、両方ともそれぞれの子にとっては真実（心理的事実）なのです。この際、教師が善悪で一方的に決めつけてしまうと、どちらか一方の気持ちが踏みにじられ、教師と子供、子供同士の関係にしこりを残します。

相互理解の場として生かす

教師がそれぞれの子供のとらえ方・感じ方を丁寧に聞き、確かめていくと、子供は「私のことを分かろうとしてくれる。」という安心感をもちます。子供は、自分の受けとめ方を教師に十分理解してもらうことで、心のゆとりが生じ、相手の子供の受けとめ方をも受け入れるようになります。